慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J. J. Chr. ボーデのパリ旅行 : フランス革命前夜の一エピソード
Sub Title	J. J. Chr. Bodes Reise nach Paris : Eine Episode am Vorabend der Französischen Revolution
Author	斎藤, 太郎(Saito, Taro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.257(116)- 271(102)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0271

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

J. J. Chr. ボーデのパリ旅行

—フランス革命前夜の一エピソード —

斎藤　太郎

1

ワイマールに転居して二ヶ月ほど経った 1787 年 9 月 10 日，フリードリヒ・シラーはドレスデン時代の友人クリスティアン・ゴットフリート・ケルナーに宛てて長文の手紙を書き送った。そのなかで彼は，当時ドイツの知識人が関心を寄せていた話題を取り上げ，こう書いている。

> ボーデはパリから芳しからぬ印象を持ち帰りました。国民は精力をことごとく失って，没落に向かい足早に進んでいるというのです。名士会の導入自体，政府の策略にすぎない — しかしそれも 5 年は早きに失したため，予想外の抵抗にあっているのだ，しかし 5 年後であれば政府もあえてこの手段は用いなかっただろうというのです。高等法院もまったく無意味だとのことです。(…) 彼が僕に言うには，彼はフリーメイソンに関してパリからある重大な事を持ち帰ってきたとのことです。彼はカトリックがもたらす危険についてベルリンの人々と意見を一にしているのですが，これについて彼が僕に語ったことの詳細はもう覚えていません。(…) 今日啓蒙主義がもたらした無秩序状態は，彼によれば主としてイエズス会士の所業だというのです。(…) ボーデは僕に**フリーメイソン**になる気があるか探りを入れてきました。当地では彼は全フリーメイソン中最重要人物のひとりとして通っています。君が彼について知っていることはありますか。[1](強調箇所は原文イタリック)

ここに示唆されているように，ヨーハン・ヨアヒム・クリストフ・ボーデは同年 8 月 27 日に，彼にとって生涯唯一の国外旅行となったパリへの

旅行を終えてワイマールへ戻ってきていた。革命前夜のフランスが財政的危機にあって，国情芳しからぬ状態にあることは，新聞や雑誌等を通じてドイツにも伝わっており，世の関心を集めていた。シラーが深い興味をもってボーデの体験談に聞き入ったであろうことは，ケルナーにその情報を伝えるべく再現していることからも窺える。だが，この書簡は同時に，ボーデのパリ旅行が国情視察という動機のにみ発したものではなく，「全フリーメイソン中最重要人物のひとり」による結社の任務遂行という意味を兼ねそなえていたことも暗示している。彼がシラーに対し示唆しつつも具体的内容の明示を避けた「フリーメイソンに関してパリから持ち帰った重大事」とは一体何であったのだろうか？

シラーのその後の書簡からは，改めてボーデがその内容を明らかにしようとした形跡は見られない。[2] しかし，ボーデのこの旅は，1989 年にフランス大革命が勃発すると，当初予想だにしなかった大きな意味を担わされることになった。革命がジャコバン独裁体制へ移行し，国王や王妃の処刑がヨーロッパ諸国を震撼させていた 1993 年，レオポルト・アロイス・ホフマンは，自身の編集する「ウィーン雑報」に，ボーデのパリ旅行が革命の誘因であったとの説を発表する。

> 啓明結社の中で高い地位を占める二人のドイツ人 ― 世界改革によって宗教や国家の既存体制に別の形態を与え，悪をなす君侯や僧侶の力を削いでこれを廃し，人間すべての自然に由来する平等を実現して，キリスト教の代わりに哲学的宗教を導入しようという，啓明結社の途方もない計画にすっかり心奪われた二人のドイツ人が，同時期パリへやってきていた。(…) 啓明結社のこの上なく狂信的な宣教精神を知るものなら，熱心な結社員である二人が，与えられた機会を利して自分たちの組織を外国へ広めようとしたことも意外とは思うまい。(…)《結合せる友》のロッジは，この世に存在するフリーメイソン諸派に関しありとあらゆる資料を収集していたため，啓明主義にも侵入の道を与えてしまうことになった。こうして間もなく，このロッジはこれに従属するすべてのロッジもろとも啓明主義に感染することになったのである。[3]

フランス革命という大激震に直面して恐慌を来していた保守派知識人の

間で，ホフマンの陰謀説は革命の原因を一元的に説明する便利な図式として広範な受容を果たした。この説はやがてロンドンに亡命中の神父バリュエルがその4部からなる大著『ジャコバン派の歴史のための覚え書き』において取り上げ，「フリーメイソン= 啓明結社 = ジャコバン派」という等式化をおこなったことにより，「フリーメイソン陰謀説」として今日まで命脈を保つことになる。[4] バリュエルの著作はヨーロッパ各国語に翻訳されて多大の影響力を及ぼしたが，彼の他にもスコットランドの自然科学者ジョン・ロビソン[5] や，雑誌「オイデモーニア」に拠っていたヨーハン・アウグスト・シュタルク，ルートヴィヒ・アドルフ・クリスティアン・フォン・グロルマン等が同様の説を展開することにより，さらに広く流通することになった。

ボーデがパリに《啓明主義》をもたらして革命を間接的に準備したとの説は,例えば20世紀に入ってからもナチス時代のフリーメイソン研究家アドルフ・ロスベルクによって主張されている。[6] しかし他方で，フランス革命期から 20 世紀に至る陰謀説の包括的な研究をおこなっているロガッラ・フォン・ビーバーシュタインはこうした説を真っ向から否定し，その根拠をこう説明している。「パリにおいてボーデが交渉を持ったのは神智学的傾向の強かったフリーメイソンたちであって，彼らが啓明主義の影響を受け入れたという説は大いに疑わしい」[7]

ボーデのパリにおける活動の目的は一体何であったのか，また,《結合せる友》とはどのような組織であったのだろうか。以下において最近公刊された資料等を参照しつつこの問いの解明を試みたい。

2

1770から80年代にかけてヨーロッパのフリーメイソンは深刻な混乱に陥っていた。1720年代にイングランドから伝播してきた,「ヨハネ三位階」（徒弟，職人，親方）からなる《イングランド・メイソン》に対し，50年代頃から「ヨハネ三位階」の上位にさらに位階を設置した《高位階制フリ

ーメイソン》諸派が様々な意匠のもとに登場したことによって，分裂の色合いを強めるのである。これら各派は，聖堂騎士団，薔薇十字団，古代エジプトの神官同盟などをフリーメイソンの起源とする伝説を各自形成して，正統性を巡って激しい抗争を繰り広げた。こうした状況を打開するため，70 年代から再三に亘ってフリーメイソン会議が開かれるが，その試みは1782 年夏，ハーナウ近郊の保養地ヴィルヘルムスバートにおけるフリーメイソン会議によって頂点に達する。

当時大陸で最大の勢力を誇っていた聖堂騎士団系フリーメイソン《厳格な服従》の最高指導者ブラウンシュヴァイク公フェルディナントの召集によって実現したこの会議は，フリーメイソンの「真の起源」，「真の上司」を解明すべく激しい議論を重ねたが，結局これら疑問の解明を見ることなく，最終的にはフランスの神秘主義的高位階制《聖都市の慈善騎士》の採択を決議して解散した。啓蒙主義的フリーメイソンと神秘主義的フリーメイソンの対決という色彩の強かった一連の議論は，神秘主義者の勝利に終わったことになる。フリーメイソンの中に啓蒙主義的公論の実現を求める者にとって落胆をさそうものでしかないこの結末は，しかし勢力拡張の機を窺っていた《啓明結社》にとっては恰好の状況を提供することになった。1776 年，インゴルシュタット大学教会法教授アダム・ヴァイスハウプトによって設立された急進啓蒙主義的秘密結社《啓明結社》は，フリーメイソンの有力者アドルフ・フライヘア・クニッゲの入会以来，ドイツ全土のフリーメイソン・ロッジを傘下に収めるべくさまざまな戦略を練っていたが，ヴィルヘルムスバートの会議においても結社員フランツ・ディートリヒ・フォン・ディトフルトを派遣して，《厳格な服従》を啓蒙主義的方向へ針路転換させようと試みていた。だが，ディトフルトは理神論的傾向の顕著な自説をあまりに直截に展開したことによって宗教的保守派の反撥を買ったあげく，彼に対する信仰告白提出の要求が決議されるという結末を招いてしまう。[8] しかし，本会議における主導権獲得の試みは失敗に終わったものの，結社内においてヴァイスハウプトに次ぐ地位にあったクニッゲは，ヴィルヘルムスバートからほど遠からぬフランクフルトの自宅に待機して，

反神秘主義路線を取る会議参加者たちを啓明結社に勧誘することに成功する。[9]《厳格な服従》において財務長官の要職にあったボーデもその一人であった。[10]

ボーデはレッシングのハンブルク時代における友人にして《学者書房》プロジェクトの協働者として，またスターンやモンテーニュの翻訳者として文学史にその名をとどめている。だが，同時代者にとっての彼は出版人・翻訳家としての顔のほか，とりわけ秘密結社に関する当代随一の権威としてつとに名高かった。彼は 1779 年からザクセン=マイニンゲン宮廷顧問官としてワイマールに居を定めると，同地で休眠状態にあったロッジ《アンナ・アマーリア》を活動再開へと導き，ゲーテやワイマール公カール・アウグストを同ロッジに参入させるなど活溌な行動を展開する。《啓明結社》入会後の彼は，ゲーテ，ヘルダー，ワイマール公カール・アウグストを入会させたほか，ヘッセン=ダルムシュタット公子クリスティアンやゴータ公エルンスト二世の協力のもと，オーバーザクセンおよびニーダーザクセン地方に結社の基盤を築くことに尽力した。さらに，1784 年バイエルンにおいて結社禁止令とともに弾圧がはじまり，ヴァイスハウプトが失脚してからは，実質的に全結社の指導者となっていた。

一方，ヴィルヘルムスバート会議の破綻は，ドイツ以外の大陸諸国にも危機感をもたらしていた。とりわけ鋭い反応を見せたのが，1771 年パリに設立されたロッジ《結合せる友 Les Amis Réunis》であった。同ロッジの指導者サヴァレット・ド・ランジュは，同時代の高位階制フリーメイソン諸派がもたらした混乱を目の当たりにして，すでにヴィルヘルムスバート会議以前からフリーメイソンの成立と歴史ならびにその目的と意義の探究に意を注いでいた。彼は 1773 年，《結合せる友》の会員を中核とし，フリーメイソンに関する研究を主な目的とする上部組織として《フィラレート派 Les Philaléthes》を創設する。《フィラレート派》は，乱立するフリーメイソン諸派に関して入手可能な文献をすべて蒐集するという作業に取り組み，数年の内にヨーロッパ最大のフリーメイソン関連蔵書を築き上げるに至ったばかりでなく，さまざまな流派のフリーメイソン会員たちとの積

極的な情報交換を試みた。こうした流れの中で《フィラレート派》は，ヴィルヘルムスバート会議の失敗を受けて新たなフリーメイソン会議の開催を構想する。《厳格な服従》のロレーヌ地方責任者だったジャン・ピエール・ベイエルルは，ヴィルヘルムスバート会議終了後の 1782 年 11 月に発表した報告の中で，その成果を「重要なテーマについての決定を怠ったため，不十分な会議に終わった」と断じ，「この恐るべき怠慢の取り返しをつけるため」に「さらなる会議」を開催することの必要性を訴えていたが，[11] 1784 年，《結合せる友》の一員となると，上述の問いを解明するためのフリーメイソン会議開催に向けて精力的な活動を開始する。《結合せる友》は 1784 年 8 月 24 日の総会において「あらゆる国，あらゆる流派のフリーメイソンをパリに召集し，彼らの知識を検証することによって，フリーメイソン諸学の本質とは何かという問いを解明する」ことを決議する。[12] 第一回会議の開催は 1785 年 2 月に予定され，ウィーンの「フリーメイソン・ジャーナル」誌上における開催通知などを通じてフリーメイソン各派の代表者に対して広く呼びかけがおこなわれた。[13] 会議のテーマは基本的にヴィルヘルムスバート会議のそれと重なっており，フリーメイソンの起源ならびに目的と意義，さらには「隠秘諸学」や「知られざる上司」にまでおよんでいた。[14] しかし，ヴィルヘルムスバートの反省に立って，[15] 可能な限り包括的な議論をおこなおうとした末に，カリオストロ，サン=マルタン，サンジェルマン伯爵といった神秘主義者や詐欺師までも招待したことが災いして，諸問題を解明するどころかむしろ混乱を助長する結果を招来してしまう。[16] 第 2 回会議は 1787 年 6 月に開催される運びとなるが，第一回会議の惨憺たる失敗の反省に立ち，参加者にはフリーメイソンの起源や意義に関する報告書を事前に提出することが義務づけられた。開催通知は改めてフランス内外のフリーメイソン各派の代表者に発送されたが，そのなかには 1782 年以来《フィラレート派》と接触のあった《啓明結社》の一員ボーデも含まれていた。

3

1785年,《結合せる友》によるフリーメイソン会議の開催予告が「フリーメイソン・ジャーナル」誌に発表されたおり，ボーデは啓明結社員フリードリヒ・ニコライ宛書簡において消極的な態度しか示していない。[17] 第一回会議が混乱のうちに終わり,1787年に新たな会議が計画されてボーデに対して招待状が送られた際も，当初は自ら会議に参加する代わりに自説を報告書にまとめて送付することを考えていた。『フリーメイソンの起源に関する試論』と題されたこの報告の内容は，四つのロッジの合同によってロンドンで1717年に成立したグランド・ロッジがフリーメイソンの真の起源であるが,1750年代からはイエズス会士がフリーメイソンに潜入してこれを操り，プロテスタント諸国をカトリックの精神的隷属下に置こうと画策しているというものであった。[18] ボーデはこの『試論』を啓明結社員カール・レオンハルト・ラインホルトの協力を得て1787年3月12日に書き上げると，3月26日から28日にかけてワイマールを訪れた同じく結社員のヘッセン=ダルムシュタット公子クリスティアンがこれを受け取り，ヤーコプ・モヴィヨンの手を入れさせたうえでパリへ送る。熱心な結社員であり，同会議に多大の関心を示していたクリスティアンは同時に，ボーデに強く会議への参加を要請したものと思われる。これに加えてボーデと同時期にクニッゲの勧誘によって結社員となっていたクリスティアン・フォン・デム・ブッシェが，旅費の提供を申し出たことによって彼はようやく参加を決意する。[19] 彼は5月1日，フォン・デム・ブッシェと共にワイマールを旅立った。

ボーデはこの旅行の過程を『1787年におけるワイマールからフランスへの旅日誌』と題して詳細に記録しているほか,[20] パリに到着してからは《結合せる友》の所蔵文献や会議記録について『フィラレート派の会議に関する覚え書き』を残しており，[21] 両資料を参照することで会議の模様およびボーデのパリにおける活動とその成果は相当程度までたどることができる。

ボーデとフォン・デム・ブッシェの二人は5月20日パリ到着を期して，ゴータ，ハーナウ，フランクフルト，ダルムシュタット，ハイデルベルク，

カールスルーエ経由でフランスへ向かった。しかし，同行者フォン・デム・ブッシェは途上の各地で物見遊山や社交生活にかまけて旅程の大幅な遅延を引き起こしてしまう。結局パリ到着は予定を大幅に過ぎた6月24日となるが，時すでに遅く，サヴァレット・ド・ランジュの自宅を会場として3月8日に始まった会議は1ヶ月前に終了してしまっていた。[22] 先行きに暗雲を予想させるパリ訪問の出だしではあったが，しかし，以後の展開はボーデの期待を上回る順調さを示すことになる。

サヴァレットとの最初の会見は到着翌日の6月25日に行われた。ボーデはサヴァレットによる会議の総括をこう伝えている。「会議は参加者不足のため完遂できなかったものの，重要な研究報告が多数寄せられたとのことだ。だがその中でも私の報告が最も重要だというのである。そして(…)こう付け加えた。〈あなたがいらしたことだけで会議全体分の価値があるのです〉」[23]

19世紀最大のフリーメイソン研究家の一人であるゲオルク・クロスは87年の《フィラレート派》第二回会議についても失敗との烙印を押し，ボーデやヘッセン=ダルムシュタット公子クリスティアンの試みも挫折に終わったと結論づけている。「ドイツのメイソン，J. Chro. ボーデは，詳細な論文を草して，これら隠秘諸学はすべてイエズス会士たちによってフリーメイソンに仕掛けられた罠であることを証明しようと試みたが失敗に終わった。彼の警告は無視された。熱烈なメイソン，ヘッセン=ダルムシュタット公クリスティアンも理性の光に満ちたフリーメイソン改革案を提出したが，これもさまざまに難癖をつけられた挙句に斥けられた。(…)超常的で自然の法則を遊離した事象が優位に立つことになり，誠実な意図をもって始まった《フィラレート派》の探究は，問いを受けたメイソンたちの多種多様な夢想によって誤った道へと導かれてしまった」[24] 以後の研究はビーバーシュタインも含めて基本的にクロスの説をそのまま受け入れているが，ボーデの記録から読みとれるのはこれとは全く違った事実である。この会議の推移を記した彼の『覚え書き』は，クロスの主張とは正反対に，神秘主義的・カバラ的・錬金術的フリーメイソンを代表する者たちの主張

が斥けられ，ベイエルル，ドーベルムニル，ヘッセン=ダルムシュタット公子クリスティアン等イングランド・メイソンへの回帰を主張する意見が次第に優位を占めるに至った過程を示している。[25] ボーデの『試論』はいわばこうした流れの中で掉尾を飾るものとして紹介され受容されたのである。サヴァレットとの初会見から三日後の 6 月 28 日には彼自身少なからぬ満足とともに記している。「11 時，《結合せる友》[26]の文書館へ。文書管理係のル・サージュ氏のほか会員もう一名が居合わせる。この人は私の報告を読んで多いに満足したと言ってくれた。聖堂騎士団と薔薇十字団に関する文書類にざっと目を通し，その中で写しが欲しいものの題名を控える。果たして写しがもらえるものやら。ここの人々について言えば，いまのところお世辞にも礼儀正しく好意的とは言えない。(…)会議の議事録はここではなく，ド・ラーンジュ氏の自宅にあるとのこと。彼が閲読の許可を与えてくれるかどうか，期して待つとしよう。許可をくれるなら私はいかようにも彼につくす所存なのだが」[27]

この段階でボーデが《結合せる友》ロッジの会員たちに対して抱いている微かな疑念と不信感は，彼らとの共同作業を重ねるにつれて解消に向かっていった。7 月 3 日の項でボーデは旅行の目的達成が近いことを安堵と満足をもって表現している。

> 早朝ド・ランジュ氏宅で資料集を閲覧。ここで読むべき報告をいくつか借り出す。(…) ペルピニャンの参事会員でメイソンのドーベルムニルがフリーメイソンの改革に関する論文を朗読する。全体として満足できる内容。私たちは書簡の交換 — とりわけ啓明結社の理念について — を約した。ド・ボンディ氏宅で昼食。サヴァレット・ド・ランジュ，ドーベルムニルとその子息も同席。(…) これまでの仕事が無駄ではなかったことを見るのは嬉しいことだ。彼らは私の説を正しいものと認めたのみならず，その他の私の考えや提案をも非常に重要と見なし，自分たちが費用を持つから冬まで同地での滞在を延長して一緒に仕事をしないか，と懇願するのだ。当然ながらこの申し出は謝絶したが，それでは 11 月か 12 月に再び来てほしいと言って譲らない。それも彼らが費用を持つというのだ! それとて容易には行くまいが，書簡を通じて能うかぎりのことはおこなうとは約束した。この三人の仲間たちは隠秘諸学への妄信とはきっぱり手を切り，純粋で健康な理性の諸理念を受

け入れる姿勢に変わっている。[28]

これと同様の内容は，約一週間後の7月10日付ヘッセン=ダルムシュタット公子クリスティアン宛書簡にも見ることができる。「この 3 人のフリーメイソンたち [=ドーベルムニル，ド・ボンディ，サヴァレット] は以前の考え方を捨て去り，いまは私と意見を一にしています」[29] ボーデと《フィラレート派》幹部たちがどのような点で「意見を一にし」たのかは，7月30日におこなわれたサヴァレットとの会談記録が伝えている。

> 7月 30 日，私の部屋でサヴァレットと会談をおこなった。彼が私に言うには，[次の]会議はおそらく 11 月末召集の運びとなるだろうことだった。だが，今度はもはや隠秘諸学の追求ではなく（私の報告によって彼らはすでにそこから脱したのだという），四分五裂の状態にあるフリーメイソンの改革について協議することが目的となるとのことである。(…) 会議における最終 5 回のセッションの議事録について尋ねると，彼はその議事録についてはまだ十分な校訂が済んでいないと答えた。また，私の報告 — 2 回読み上げられた唯一の報告だという — によってこの会議は引導を渡されたのだと付け加えた。(…) しかし，今後ドーベルムニルと私は — 改革の構想に関して — これからのフリーメイソン会議において全面的な信任を得ることになるとの由である。[30]

さらに同日の記録は，《フィラレート派》がボーデに対し自分たちの位階および儀礼に関する全面的な情報を提供し，ボーデの主導のもとに同組織を《啓明結社》と融合させる点で合意が得られたことを伝えている。「彼 [サヴァレット] としては，フランスでは《啓明結社》という名称の代わりに《フィラデルフ Philadelphes》を，《フリーメイソン位階》の代わりに《候補準備級》を用いたいとのことである」[31]

組織全体に関わるこの取り決めはただちに個人的レベルに於いて実行に移され，《結合せる友》の幹部数名が《啓明結社》への入会をおこなった。早くも二日後の8月1日にボーデはサヴァレットの入会誓約書および，新規入会者に提出が義務づけられている身上調書を受理しており，8月4日にはド・ボンディとルーティエ・ド・モンタローがこれに続いている。ボ

ーデは書いている。「われわれ 4 人は，人類の幸福のため全力を尽くすことを厳かに誓約した。アーメン!」[32] また，ボーデがパリ滞在中頻繁に接触し，フリーメイソンの改革に関して協力態勢を取ることになったドーベルムニルについてもやはり勧誘に成功したものと考えてよいだろうし，サヴァレットの秘書ル・サージュもサヴァレットと行動を共にしたと推測できる。ボーデのパリ訪問が《啓明結社》のフランスへの勢力拡大を目的としたものであり，彼がその成果に意を強くしたことは，ワイマール帰着後間もない 9 月 9 日，おりしも同様の使命を帯びて旅行の途上にあったフリードリヒ・ミュンターに宛てて「フランスには見通しが立ちました」と書き送っていることからも窺うことができる。[33]

フランスのフリーメイソンたちとドイツの啓明結社員の間に密接な交流が存在していたばかりでなく，《結合せる友》の幹部たちが同時に《啓明結社》に所属していたことは上に見たように明らかである。さらに，ボーデの 1787 年夏のパリ訪問から一年後には実際に《結合せる友》の大規模な組織改革が実施され，それまでの《フィラレート派》には存在しなかった《枢密高位参事会》が導入された。この《ロッジの中のロッジ》は 1788 年の設立段階で 76 人の所属が確認されているが，その指導的ポジションにはボーデが《啓明結社》への勧誘に成功したフランス人ドーベルムニル，サヴァレット・ド・ランジュ，ル・サージュ，ルーティエ・ド・モンタロー，ド・ボンディに加えてドイツの啓明結社員ジギスムント・ファルゲラ，ヘッセン=ダルムシュタット公ルートヴィヒ，カール・ハインリヒ・フォン・グライヒェン，レオポルト・フォン・コロヴラート，クリスティアン・ダニエル・フォン・マイヤー，フリードリヒ・ティーマン等 9 人の名前が見られる。サヴァレットをはじめとする《結合せる友》の会員がフリーメイソンの世界のみならず，アンシャン・レジーム下の官僚組織や経済界において高い地位にあったことを考慮し，[34] またチューリヒの銀行家ヨーハン・カスパー・シュヴァイツァーやフランツ・ミヒャエル・ロイヒゼンリング，また後にマインツ共和国に参加したゲオルク・フォルスター等の啓

明結社員たちがパリにあって活動をしていたことを考え併せるならば，ホフマンやバリュエルの陰謀説が信憑性を持ち始めるように思われるかもしれない。残念ながら《結合せる友》の文書類は革命期の混乱の中で散逸してしまったため，最終的にはこのロッジが革命とどう関わったかを知ることはできない。しかし，サヴァレットが国王 ルイ 16 世に対する裁判の際，死刑反対の側に立ったことに見られるように，彼らとジャコバン派との連続性を証明する材料は存在していない。1798 年に発表されたボーデの追悼文の匿名筆者はその記述内容からも明らかに『旅日誌』を読んでいることが窺えるため，おそらくは彼と親しい関係にある啓明結社員であったと思われるが，ホフマン他の陰謀説を否定して次のように述べている。「《結合せる友》の会員たちは，ボーデの考え方や提案がフリーメイソンの改善のうえで重要であると認めた。しかし当時行動を起こすことは時宜に適っていなかった。というのも，彼らはあの重大な時期にあってそうでなくとも国事上・職務上急を要する業務を山ほど抱えていたからだ」[35] 死後もなお陰謀の嫌疑をかけられ続けた友人の名誉回復という意図が見え隠れするとはいえ，この説明は実状をある程度伝えていると考えられる。1788 年以降ボーデの残した記録の中に《フィラデルフ》に関する言及は見られないのである。[36]

注

1 Schiller an Körner am 10. 9. 1787. In: Schillers Werke. Nationalausgabe. Weimar 1989. 24.Bd, S.152 -154.

2 シラーはカール学院在学中より度々啓明結社参加の勧誘を受けていたが，『ドン・カルロスに関する書簡』の第 10 書簡で明言している通り，最終的にはフリーメイソンにも啓明結社にも加わらなかった。シラーと啓明結社との関係については Shings, Hans-Jürgen: Die Brüder des Marquis Posa. Schiller und der Geheimbund der Illuminaten. Tübingen 1996 を参照のこと。

3 [Hoffmann, Leopold Alois]: Ein wichtiger Aufschluß über eine noch wenig bekannte Veranlassung der französischen Revolution. In: Wiener Zeitschrift, 5.Bd. 2.H, S. 145-158, hier 153f.

4 バリュエルは，革命前にベルリンを訪れたミラボーがまず啓明結社に加入し，彼の仲介によりパリへ招かれたボーデが本格的な組織拡大の活動を行ったとしている。Barruel, Augustine de: Memoirs, illustrating the history of Jacobinism, written in French by the Abbe Barruel, and translated into English by the Hon. Robert Clifford. London 1788.

5 Robison, John: Proofs of a Conspiracy against all the Religions and Gouvernments of Europe carried on in the Secret Meetings of the Freemasons, Illuminati und Reading Societies, collected from Good Authorities. London 1797.

6 ロスベルクの著作は原資料の丹念な渉猟をおこなっている点で参照文献として一定の価値が認められるが，反ユダヤ主義とフリーメイソン陰謀説を展開するためそれらの資料を一部歪曲しているところに難がある。Roßberg, Adolf: Freimaurerei und Politik im Zeitalter der Französischen Revolution. Berlin 1942, S. 87 ff.

7 Rogalla von Bieberstein, Johannes: Die These von der Verschwörung 1776-1945. Philosophen, Freimaurer, Juden, Liberale und Sozialisten als Verschwörer gegen die Sozialordnung. 2., verb. u. verm. Aufl. Frankfurt a. M./ Bern/ Las Vegas 1978, S. 103f. この著作は，フランス革命期に保守派の側から陰謀説が展開されるに先立ってイエズス会陰謀説に代表される「左派による陰謀説」が流布していた事実に全く触れておらず，その意味で不十分の感を免れない。

8 ヴィルヘルムスバート会議については Hammermayer, Ludwig: Der Wilhelmsbader Freimaurer-Konvent von 1782. Ein Höhe- und Wendepunkt in der Geschichte der deutschen und europäischen Geheimgesellshaften. Heidelberg 1980. を参照のこと。

9 [Knigge, Adolf Freiherr]: Philo's Endliche Erklärung und Antwort, auf verschiedene Anforderungen und Fragen, die an ihn ergangen, seine Verbindung mit dem Orden der Illuminaten betreffend. Hannover 1788, S.84.

10 ボーデを勧誘した際のやりとりについてはクニッゲによる 1783 年 1 月の報告が伝えている。Van Dülmen, Richard: Der Geheimbund der Illuminaten. Darstellung, Analyse, Dokumentation. Stuttgart/ Bad Cannstatt 1975, S. 294 – 299.

11 [Beyerle, Jean Pierre:] Des Hochw[ürdigen] Br[uders] L[udovici] a Fas[cia] Präfekt des Loth[ringer] + (= Kapitels) Visit[ators] des Pr[iorates] von Aust[rasien] Abhandlung über die allgemeine Zusammenkunft der Freymaurer, bey dem Gesundbrunnen in Wilhelmsbad, ohnweit Hanau. Ins Teutsche übersetzt, mit Anmerkungen und Erläuterungen, von R[itter] v[om] S[chwan] (= Adolf Freiherr Knigge), [Frankfurt a. M.] 1784, S. 253

12 Le Forestier, René: Die templerische und okkultistische Freimaurerei im 18.

und 19. Jahrhundert. 4. Buch. Heidelberg-Leimen 1992, S. 117.

13 Journal für Freimaurer. Als Manuskript gedruckt für Brüder und Meister des Ordens. Hrsg. von den Brüdern der Loge zur wahren Eintracht im Orient von Wien. 2. Jg., 1. Vierteljahr. Wien 1785. S. 195ff. および 2. Jg., 2. Vierteljahr. Wien 1785. S. 226.

14 同会議において追求された問いの詳細については，Nettelbladt, C[hrisrian] C[arl] F[riedrich] W[ilhelm] von: Geschichte Freimaurerischer Systeme in England, Frankreich und Deutschland. Vornehmlich auf Grund der Archivalien der Großen Landesloge der Freimaurer von Deutschland bearbeitet. Als Manuscript für Brüder herausgegeben von der Redaction der Zirkel-Correspondenz. Berlin 1879. [Nachdruck: Sändig Reprint, Vaduz /Liechtenstein 1993], S. 156 –165を参照のこと。

15 ベイエルルは，ヴィルヘルムスバート会議が全フリーメイソンの針路決定を目標に掲げつつ，いくつかの重要な流派が招待されていなかったことを失敗の一つに挙げている。Beyerle, a.a.O.S. 254.

16 カリオストロは，《真のフリーメイソン》の秘法を駆使して人間と造物主の媒介者である精霊を呼び出して見せることを約し，そのかわりに，《フィラレート派》が収集した文献はすべて邪説であるとして焼き払うことを要求したという。Lennhoff, Eugen u. Oskar Posner: Internationales Freimaurerlexikon. Wien 1932 (Nachdruck: Wien/ München 1992), Sp. 1201. ネッテルブラットは「この会議は何ら成果を挙げなかった」と断じている。Nettelbladt, a. a. O. S. 161.

17 Schüttler, Hermann: Johann Christoph Bodes Reise nach Paris im Sommer im Jahre 1787 und die Loge „Les Amis Réunis". In: Quatuor-Coronati-Jahrbuch 27 (1990), S. 38

18 Essay sur l'origine de la Franche Maçonnerie. MS. HstA Darmstadt (Nachlaß Christian Ludwig) D 4 Konv. 583 Fasz. 8. 引用は Bode: Journal, S. 114 に拠る.

19 1787 年 4 月 25 日の日記に「フォン・デム・ブッシェ氏同地へ来訪。彼と共にパリへ赴くべしとの決議がなされる」と記していることから窺えるように，ボーデの参加は結社の意思による決定と考えられる。Bode, Johann J. Chr.: Tagebuch, anfangend am 2. Januar 1787 bis 6. December 1788, fortgesetzt vom 28. März 1793 bis 12. Juni 1793. Archiv des Groß-Ostens der Niederlande, Den Haag. Klossiana 190 D 14, S. 7.

20 この記録（手稿はドレスデン国立図書館所蔵）は，1994 年フリーメイソン研究家ヘルマン・シュットラーにより詳細な注を添えて出版された。Bode, Johann Joachim Christoph: Journal von einer Reise von Weimar nach Frankreich im Jahr 1787. Hrsg. sowie mit einer Einleitung, Anmerkungen, einem Register und einem dokumentarischen Anhang versehen von Hermann Schüttler. München 1994

21 Bode, Johann Joachim Christoph: Sur les Memoires au Convent des Philalethes. Schwedenkiste XX Nrn. 136 u. 137.

22 ロスベルクは『旅日誌』を参照しながらも，記載された事実を歪曲してボーデが会議に参加したと述べている。Roßberg, a.a.O. S. 88.

23 Bode: Journal, S. 246

24 Kloss, Georg: Geschichte der Freimaurerei in Frankreich. Bd. 1. Darmstadt 1852, S. 315

25 Bode: Sur les Memoires, S. 40 ff.

26 原文においてボーデは "Amis Réunis"のアナグラム"Misa du Renis"を使っている

27 Bode: Journal, S. 259.

28 Bode: Journal, S. 273 f.

29 Bode: Journal, S. 112.

30 Bode: Sur les Memoires, S. 14/ 15. 引用は Bode: Journal, S. 112 に拠る。

31 Bode: Sur les Memoires, S.14. 引用は Bode: Journal, S. 112 による。当時フランスには《啓明結社》のフランス語訳"Illuminé"と同名の神秘主義的フリーメイソン組織が存在しており，これとの混同を避けるため別の名称が選ばれたものと思われる。《啓明結社》において《フリーメイソン級》は，《養成級》と《小啓明士》の中間に位置する位階であった。

32 Bode: Sur les Memoires, S. 16/ 17. 引用は Bode: Journal, S. 113 に拠る。

33 引用は Schüttler: Bodes Reise nach Paris, S. 41 に拠る。ミュンターは 1781 年結社員となり，84 年から 87 年にかけてイタリア各地で《啓明結社》の勢力拡大に尽力し，86 年にはナポリに結社支部を設立することに成功する。

34 Schüttler: Bodes Reise, S. 42 f.

35 Schlichtegroll, Friedrich: Supplement-Band des Nekrologs für die Jahre 1790, 91, 92 und 93, rückständige Biographien, Zusätzte und Register enthaltnd. Gotha 1798, S. 386 f.

36 Fehn, Ernst Otto: Rezension zu „Journal von einer Reise". In: Arbitrium. 1/ 1996, S. 79 – 82, hier S. 80